



Title	発達研究に関するノート：城戸先生との出会いとかかわらせて
Author(s)	三宅, 和夫
Citation	北海道大學教育學部紀要, 48, 1-15
Issue Date	1986-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29296
Type	departmental bulletin paper
File Information	48_P1-15.pdf



発達研究に関するノート

—城戸先生との出会いとかかわらせて—

三宅和夫

A Note on Developmental Research : To the Memory of the Late Professor Kido

Kazuo Miyake

目 次

はじめに	1
1 個人を時の流れの中で捕らえること	3
2 個人をその生活の中で捕らえること	8
おわりに	13

は じ め に

城戸先生がお亡くなりになってはや9ヵ月余りが過ぎ去った。思い出すと私がはじめて先生にお目にかかったのは1953年春東京世田谷のお宅においてであった。当時私は何年か留年した後なんとか東京大学文学部心理学科を卒業して定転もないままに大学院に籍を置いていたのであった。旧制大学院というところはこうした連中をも受け入れてくれていたのである。私は心理学科における完全な脱落者でほとんど心理学でめしを食うことをあきらめていた。私とほぼ同年でずっと優秀な学生でありその後もすぐれた発達心理学研究をやって来られた藤永保教授は彼の編著書(1973)の序文で、「ある心理学者のいうところでは今の心理学界(注:1960年ごろのことかと思われる)に暗黙のランクづけがあるのだそうである。トップはむしろ知覚や学習の研究で、記憶・思考・情意行動などの分野も実験心理学の枠内に入っていれば、いちおう地位が認められる。…(中略)…教育心理学その他に至っては、いわゆる応用心理学に属し、正統な研究にたえられない脱落者のたずさわるものとされている」と書いている。さらに「こんな具合であるから、まして児童心理学などは子ども好きの変り者が、自分の個人的関心を満足させている領域くらいにしか思われていなかったのも事実であろう」とも述べている。私の卒論のテーマは、「児童小集団の構造の変容について」というものであったから、まさに脱落者にふさわしいものであった。同期には他にも数人は社会心理学・児童心理学関係の卒論を書いた者がいたが、大体就転してしまっていたようで、城戸先生からの要請に応じて東大から推せん(?)できたのは私だけだったというのが実情であったと思っている。私の卒論は研究室ではほとんど問題にもされなかったが、のちにある方からすすめられ教育学会機関誌「教育学研究」(1955)に掲載された。教育学的に

すこしは見るべきものがあつたのかどうかは分からないが。

さて、私は先生のお宅へ緊張した気持でうかがつたのであるが、先生は最初に「君は子どもを対象にした研究をやったようだが、子どもは好きなのかね」と尋ねられ、返答に窮したのである。「よくわかりません」とかいささか曖昧なことを述べたようである。それから先生の北大にある古電車の幼稚園（北大幼児園）についてのお話が始まったのである。先生が幼児や母親や保育者のことを熱をこめて語られ、心理学研究の批判をされるのを聞いているうちに、私は遠い北国に行ってみようかという気持が自分の中で次々にはっきりとしたものになっていくのを感じたのである。「北大へ来たら君には主に幼稚園の子どもにかかわってもらいたい」と先生に言われたときは、不安がいっぱいであつたことを覚えている。なにしろそれまで幼い子どもなどとともに観察したことはなかつたのであるから。

とにかくそれから半年後に私は北大教育学部に助手として採用され、毎日を幼児・母親・先生とともに過ごすことになったのである。

今日でこそ私はよく学生に「将来子どもの教育・心理臨床などの仕事につく者にとって、具体的に個別の事例に継続的にかかわりながら発達の変化を理解していくことを通して、しだいに子どもをみる眼を養うことはとても重要なことで、心理学の方法を習い、心理学の用語を学ぶことだけで子どもを理解することなどはできない。現実の生きた子どもの姿にふれることこそ大切なのだ」などともっともらしいことを言うが、当時幼稚園で午前中子どもたちとあそび、午後母親と話をしたり家庭訪問をしながら、これで一体いつになったら心理学の論文が書けるだろうか、などと深刻に悩んだことを告白しなければならない。

さて、私はここまでに「児童心理学」という言葉を何回か使ってきたが、「発達心理学」とは一度も言っていない。実際当時「発達心理学」という言葉はあまり使われていなかったのであり「児童心理学」、「青年心理学」また時に「幼児心理学」というようないわゆる発達の時期別の名称が用いられていたのである。今日では「発達心理学」ということのほうがはるかに多いが、それは心理学における発生的方法として発達研究が重視されるようになってきたことの現われであろう。ただ眞の発達研究がさかんになったかどうかはいささか疑問である。「発達」ということが本来変化の「過程」を意味するものであるのに、これまでの多くの研究においては変化の「結果」として捕らえられ、そのために力動的な視点を欠き、静的な現象記述にとどまって、変化の過程の説明や予測を目ざすという姿勢があまり見られなかつたのである。そもそも「児童心理学」において歴史や方法論が欠けていたことがこうした事態につながっているといえよう。そうした状況のなかで城戸先生は著書「心理学と教育」（1958）の才1章から3章までにおいて児童心理学の理論的考察を試みておられるのであり、それは非常に貴重なものである。それはまた児童心理学の問題史でもある。先生は北大御在任中に「教育研究法」という講義のなかで、この著書のなかにかかれたことについても講じておられた。先生は心理学を客観的な文化形象の成立と発展に対し主観的な人間精神の表現と発達を問題として研究する方法を提供するものと考えておられ、さきの著書のなか（34～35ページ）でつぎのように述べておられる。「人間教育の心理学的基礎としては、教育の理念として、それを生徒の主観的精神に再構成する方法を研究することで、刺激と反応という方式によってあらわすと、教科とか教材とかは文化形象としての刺激あるいはむしろ作用であつて、それが生徒の意識や行動に再構成されて表現されるのが反応あるいはむしろ反作用である。そしてその関係が成立する場が歴史的・社会的現実性としての教育であつて、この教育的現実性を問題として社会の発達を人間に集約して考えるのが教育科学の課題であり、文

化と人間との相互作用にシラーのいう生ける形態としての人間精神の発達に合法則性と合目的性を発見するのが、人間教育の基礎となる人間性の心理学であろう」。

ここには教育科学において、心理学の担う役割を非常に重視する先生の考えがよく示されている。しかしこれは心理学の現状からみてなかなか困難なことであり、心理学が先生の言われるほどに教育に貢献できるものなのかはいまもって私にはよく分からないのである。先生はおそらく私が先生から言われた「教育実験」をさっぱりやろうとしないことに不満であられたと思うが私は当時から、そうしたことをやる前提として歴史的・社会的存在としての人間の発達ということを理解することが必要と考え、今日までかなり基礎的な研究をやってきたのである。このような私に対して先生は一度も不満をお述べにならず、じっと見守るという態度で接してくださったのであるが、それにお応えするような仕事ができぬまままで今日に及んでしまった。

私をはじめ先生にお会いしたとき先生は59歳を過ぎておられたが、いま私は59歳を過ぎている。先生の偉大さくらべ研究者としても教育者としてもまったく取るにたらずなことしかしてこなかったことを反省することしきりであり、あまり筆もうまく進みそうもないが、以下これまでの経験をふまえて、発達心理学の研究に欠けていたことのいくつかについてすこし考えてみたいと思う。それらは私がたえず解決を求めて苦闘しながらいまだほとんど答えを得ていないこともある。どうやら私はやはり心理学界のおちこぼれのままで終りそうである。

個人を時の流れの中で捕らえること

私が心理学の学生として学びたかったことのひとつは人がいかにして大人になっていくのかということであった。なぜいま自分はこのような人間になっているのかということについてかなり深刻に考えさせるものが、私の生育史の中にあったことはたしかである。この点について深く立ち入ることは控えたいが、とにかくこのような私の欲求を満たしてくれるものは当時の心理学研究にはほとんどなかったと思う。いわゆる実験心理学が幅をきかせていた時代であればそれは当然だったのである。教えられたのは知覚や学習の研究のことがほとんどであったと記憶している。たしかにそれは自然科学的厳密さを大切にしていた。しかしそのために研究対象は人工化、抽象化されてしまい生きた人間の本質に迫ることができるとは到底考えられなかった。私はすっかり失望し卒業まで全くある意味では怠け者の学生として過ごすことになってしまった。

実験心理学研究において独立変数と従属変数とはほぼ同一時期に測定されその関係が論じられる。たとえばある種の強化が子どもの言語学習に及ぼす影響ということは扱われるが、子どもの過去経験がその場にどのように関係するかとか、その場で成立した学習が後の発達にどのようにかわるかなどはまったく問題とされないのである。私が心理学に期待したのはまさにこうした歴史的因果関係の解明ということであったが、そうしたことを求めることは無理であると知ってすっかり心理学ぎらいになってしまった。といっても退学するまでの勇気もなくずるずると籍を置いていたのであるが、そうしたなかで唯一興味が持てたのは Lewin の一連の業績であった。とりわけ彼の *A Dynamic Theory of Personality* (1935) は何回も読みかえた。それは意志、要求、情動といったことを扱い心理学を現実の個人・社会に当てはめているものであり、実際の問題にふれ、具体的な事例についても論じていたのである。彼の心理学的事象が体系的因果の法則に支配される等質的世界の出来事として扱われるという考え方は、私にとっては他のあまりにも分析的で記述的な研究よりは生き生きとしたダイナミックなものに思えたのである。もっとも彼においては歴史的要因は個人の現在の生活空間の場の中において扱われるとして直接的には問題

とされないのであるが、以後しばらく私はLewinを参考にしていくつかの小さい実験的研究を行った。

私が歴史的存在として人間を捕らえることの必要性についてより具体的に実感することができるようになったのは、北海道大学教育学部への赴任(1953年)という機会に恵まれたことによる。とりわけ城戸先生から受けた影響を忘れることはできない。周知の通り先生は無認可の古電車の幼稚園として当時知られていた北大幼児園を開設(1952年)されておられたのであるが、これは子どもの生活を教育的実験によって観察すること、社会的環境によって子どもの行動を分析すること、子どもの発達していく状態を詳細に観察すること、などの必要性を先生が強く感じておられたことが一つの大きな理由であったと思われる。先生のもとで仕事をさせていただいたのはわずか3年半(1953年10月～1957年3月)であったし、多忙な先生にゆっくりとお話をうかがう機会はそれほど多くなかったのであるが、私のその後の研究に実に大きな影響を与えられたと思う。この3年余の間にこれといってまとまった研究をすることはなかったのであるが、多くの幼児との日々のふれ合い、保育者とともに子どもたちの変化の過程を詳細に記述していくこと、同じような働きかけをしてもどれほど子どもたちによって反応に違いがあるかということの検討、母親たちに子どもの生育史について詳細に語ってもらうこと、家庭訪問によって子どもの生活環境についての知識をうることなどの他では到底獲得できぬ貴重な体験をすることができたのである。それはアカデミズムとはひどく縁の遠い仕事のように思えたこともあり深く悩んだこともあったが、発達心理学研究を行うために不可欠の実習をさせていただいたのだということがこのごろになって分かってきたような気がするのである。このような体験から私は発達における因果的な法則を定立するということが非常に重要であるが、それと同時にとてつもなく困難であることを学んだ。当時の児童心理学・発達心理学においては次のようなエセ三段論法が横行していた。たとえば、1) 赤ん坊のときに母親から十分に世話をしてもらわなかった子どもは就学前期になって行動上の問題を示す、2) 5歳になる和夫には指しゃぶり、夜尿などの問題が見られる、3) だから和夫は赤ん坊のころ母親にあたたく世話をしてもらわなかったといえるというようなことである。このようなエセ三段論法は今日でもしばしば用いられているようである。言うまでもないことであるが、和夫の指しゃぶり、夜尿の原因は、乳児期に母親に十分に世話をしてもらわなかったことであると推論する根拠は、原因と考えられることが時系列的に先行しているということだけである。けれども多くの発達研究が時間的に前後する2時点において資料を収集しその間に関係——多くの場合相関係数によって——を見い出したとき、そこに因果関係を推定するということを行っている。

私は前述の貴重な体験の中で、当時の発達心理学研究の成果に基づいて語られている一般化——それはovergeneralizationと言ってもよいものであるが——が非常に危険なものであることを感じるようになった。そのころ私は4～6歳児に接していたので、その年齢以前の生育条件については母親の報告に依存せざるを得なかったのであるが、母親の過保護、放任などといったグローバルで不完全な概念を先行要因としてみると子どもの行動との間にはそれほどはっきりとした関係は見られなかったのであった。一見同じような扱いを母親から受けていても、ある子どもは問題行動を示すようになるが、別の子どもには全く問題が見られないというようなことにしばしば出会ったのである。こうした体験を通じ私は次第に発達初期からの縦断的研究を行うことに魅力を感じはじめたのであるが、それは決して容易なことではない。そこで自分の手に負えそうな小規模なものからということで1960年から「知能指数の変動と行動特性の関係」という縦断的

研究を始めた(1968)。これは子どもの動機や行動の発達・知能指数の変化と母親の子どもへの働きかけとの間にどのような関連があるかを、子どもの5歳時から12歳時まで縦断的に調べたものであるが、それは従来の母子関係の研究の行き方とは反対に子どもの側の変数から入って、その先行要因としての母親側の変数との関係を探索しようとしたものであった。それまでの多くの研究で扱ってきた母親の変数があまりにもグローバルで、子どもの行動の先行要因を的確におさえることが困難であったので、それをすこしでも打開したいと考えたからであった。この研究の結果は子どもの5～6歳ごろにおいて母親が自立への要求を多くしていることと12歳までの知能指数の上昇傾向とに関係があることなどを一応は明らかにしたが、母親については5～6歳時においてしか調べていないところに問題があることを認めざるを得ない。また5歳以前のことにについて扱っていないという大きな難点もあった。

ところで1964年から1965年にかけて私は Harvard 大学を中心として米国の各地で行われてきた縦断的研究についてその進め方、問題点などを知ろうとしてそれぞれの実施責任者を訪ねた。とりわけ1920年代より行われてきた Fels Research Institute for Human Development における出生時より成人するまでにわたる縦断的研究について当時その資料の分析をし報告書をまとめ上げていた Kagan と密に交流することができたのは最大の収穫であった。長年にわたる資料の収集のすべてに Kagan は直接にかかわったわけではないが、彼と Moss は出生時よりの膨大な資料の分析にあたったのである (Kagan & Moss, 1962)。彼らは特定な理論的立場に立たないで、89名の対象者について発達の連続性を検討したのであるが、6歳から10歳という時期に示された多くの行動が、成人初期の同種の行動をかなり予測することを明らかにした。他方0～3歳、3～6歳の時期の行動は彼の行動とほとんど関係がないということも明らかになった。さらにある行動が異なる年齢間において連続性を示す場合、その行動が伝統的な性別基準にそったものであることも示している。たとえば女子においてのみ依存行動に連続性がみられるのは、それが女性性別基準にそったものであるからというのである。このような分析の問題点はそれぞれの時期の資料間の関係を相関的に検討したにとどまるということ、子どもの行動の連続性ということに力点を置いているが、両親その他の人との関係についてほとんど検討していない(資料不足によるところが大きいにしても)こと、したがって性別基準による説明を除いては連続性-非連続性の説明がほとんどなされていないことである。もっともいくつかの典型事例についての歴史的な発達の様相についての具体的記述は非常に示唆に富んでおり、その後の研究の方向を予見させるものがある。とりわけこのような分析を通して抑制的傾向 (behavioral inhibition) —— 見知らぬ人、予期せぬ事態などに直面したときに示されるもので、身体の動きや発声が抑制されたり、傍にいる親しい人への接近を求めるような行動によって表現されるもの —— における個人差が生後1年以前から成人するまでの長期にわたって維持されることが多いことを見いだしたことは興味深い。このような傾向における個人差は個人の生育の過程で受ける社会化の経験と個体の生来的な要因(遺伝的要因と胎生期の経験)によると考えられ、この2要因の相互作用のあり方が抑制的傾向の連続性-非連続性を決めるものであろう。Kagan はこの10年ぐらいにわたりこの問題についての実証的研究を行っており、その成果が期待される。

子どもの個人差の問題とかわかって、当時私が興味深く読んだのは Thomas らのいわゆる New York Longitudinal Study についての最初の著書 Behavioral Individuality in Early Childhood (1963) であった。Thomas, Chess らは児童精神医学者であるが、発達心理学者が関心を払うことの少ない個人の示すユニークな行動特徴ならびに、それが環境との相互作用のなかで果たす

役割を重視したのであった。彼らは生後数か月においてみられるような行動的特徴における個人差が、どのように持続して後の発達に対して影響を及ぼすかということを明らかにしようとしたのであったが、彼らによればこのような個人差から二つのことが生じるという。まず、同じ環境刺激に対して異なった子どもが異なった反応をするということである。たとえば、同じ大きな物音に対して強く反応する子どももあれば、ほとんど反応しない子どももある、というように、環境が子どもに及ぼす影響というものは一様ではないのである。第二には、同じ環境刺激が子どもによって違う受けとられ方をすることから、そのような異なった子どもからの反応が環境に及ぼす効果も異なったものになるということである。ちょっとした物音にも敏感に反応する子どもが母親に及ぼす影響は、あまり反応しない子どもの及ぼす影響とは非常に異なるであろう。このようにして、つぎつぎに生ずる子どもと環境との相互作用が、発達に大きな影響をもつということなのである。

彼らは発達最初期にみられる行動特徴における個体差を明らかにし、子どもと環境との相互作用を生後10年間にわたって縦断的に捕らえていったのであるが、このような個体差がある程度持続的に子どもを特徴づけていること、さらにこのような個別の子どもの特徴が、親の子どもへの働きかけ方や、親の人格的な特徴との間には、はっきりとした関係を示さないことを明らかにしている。彼らは発達の過程において子ども側の要因が大きい働きをするということを指摘し、個体と環境との循環的なフィードバックを重視したわけで、方法的には問題となるところもあるが、発達における連続性・非連続性の問題、個体と環境との相互作用の問題に関して貴重な情報を提示したという点で評価されよう。なお、生物学的個体差の問題を重視するということは、近年の発達心理学研究における大きな特徴であるが、この点については稿を改めて論ずることにしたい。

米国より帰国した1965年の終りから私がその後約10年にわたって行った「子どもの発達と親子関係についての縦断的研究」は、出生前から学童期にわたるものであったが、特に生後2年ぐらいいまでの間の資料収集は小児科医・看護婦・助産婦・保健婦との共同研究として行われたのである。これによって新生児・乳児に接する機会、家庭における母子の相互交渉を観察する機会が与えられたことは、私にとってはその後の研究のための訓練として貴重なものであった。当初約50例から出発し、学齢期以後においてはその約半数しか追跡できなかったということ、資金、人的物的資源の不足等から縦断的研究といってもその資料収集の頻度が必ずしも十分でなかったこと、さらには私自身にはっきりとした仮説がなかったことなどのために多大の労力を投じたわりにはその成果はまとまったものとはなり得ていない。もちろんこの間ほとんど毎年のように学会報告を行い、いくつかの報告を書いてはいるが、なんといっても探索的研究の域を出るものではなかった。しかし個々の子どもと母親に長い間にわたって接し資料を分析し検討していくなかから、従来の心理学の研究で、ある親の行動・態度のタイプと子どもの発達との間に因果関係があるかのごとくに述べられていることが実はほとんどなにも明らかにしていないにひとしいこと、「発達における直線的連続性」・「初期経験の連続性」・「人格特性の固定性」などの概念は複雑、微妙、かつ豊かな個人の心理的発達の問題の解明にとって不適切なものであることなどを学ぶことができたと思うのである。発達についての単純な公式化や範疇化を行うなどということは全く非現実的なことであることは今日では常識となっていると考えるが、私はこの研究の経験を通して身をもって感じる事ができたのである。いずれまとめた報告書を作成したいと思っているが、それができたとしても事例的報告やエピソード中心なものになるのではないかと考えている。

とにかく発達についてのこれまでの研究から一般化を行うことはかなり限定されていると言わざるを得ない。それはある程度長期にわたり頻回に子どもの縦断的観察を行うとともに、彼らの知的・社会的・情動的特徴について幅広く測定をするというような試みがほとんどなされていないからである。ほとんどの研究は横断的であり、観察も実験室においてであれ家庭においてであれ、短時間のものである。私の知る限りにおいても、生育環境条件における差異と子どもの発達の諸側面との関係を時間の流れの中できめ細かくたどったような研究はまったくなされていないのである。そのような研究がなされるならば、それは将来における明確な仮説を検証するための研究のために豊かな素材を提供するものになるであろう。

私たちもそのような認識にたって1980年より「乳児の気質・母子相互作用と愛着の形成」についての縦断的研究に着手したのである。このようなテーマを選んだのは、当時（今日においてもそうであるが）発達研究の分野でかなり論議の集中していたことのひとつが、いわゆる愛着（attachment）形成とその先行要因としての母子相互作用を中心とする乳児の経験との関係についての問題であったからであった。Ainsworthが米国の中流階級の小さいサンプルについて彼女の開発したStrange Situation Proceduresによって測定した1歳児の母親との再会状況において示す行動による愛着の分類（安定・不安定という）と生後1年間における子どもに対する母親の働きかけ（sensitivityの有無）との間の関連を報告（Ainsworth, Blehar, Waters and Wall, 1978）したことがこのような関心をよびおこす引き金になったことは周知のことである。しかし私たちが研究に着手したころ、この点について実証的に研究し検討するということはほとんどなされていなかったのであった。私たちはそうしたことの検証とともに子どもの気質（temperament）がStrange Situationにおける行動にかなりのかかわりをもっているのではないかという仮説（Kagan, Kearsley and Zelazo, 1978）を検証すること、さらには母親の子どもへのかかわり方という要因と子どもの気質要因との交絡について仮説発見的にその愛着形成への関連を探索しようとすることを目的とした。その上さらに、生後1年間の発達の諸過程がその後の3～4年間において生ずる個人差とどのようにかかわるかについても明らかにしたいと考えたのであった。私たちの研究は、1980年、1982年に出生した子どもたちを対象として進められ現在もまだ一部資料が収集されつつあるが、1980年生まれの子どもの生後1年間についての資料の分析結果については、中間報告の形ですでに発表した（1983, 1985）。その中で愛着の型における個人差に及ぼす子どもの気質的要因と母子相互作用の影響について実証的資料を提示するとともに、私たちの対象とした子どもがStrange Situationにおいて示した行動が米国、ドイツなどのいくつかの国における研究の結果とかなり異なることも明らかにし若干の解釈も試みた。その後1982年生まれの子どもたちについてもほぼ同様な結果を得たこと等も報告している（1985, 1986）。ここでその詳細について述べることはしないが、私たちはさきにも記したようにこれらの研究はやはり不十分な記述によって問題の発見のための探索を行ったという水準にとどまったということを認めざるを得ない。生後1年以降幼児期までにおける資料の分析についても同様なことが言える。私たちが、あえて1986年生まれの子どもたちを対象とする第3次の研究に着手したのも、このような反省のうえに立ってのことである。

縦断的研究にはさまざまな困難が伴うことは、ここで改めて述べるまでもない。それにもかかわらず、私はそれが発達研究においては必須の方法であると思うのである。ただ発達という複雑なモデルを検討することの必要な分野での研究においては、方法的洗練とともに、問題をすこし焦点化していくことも必要であろう。仮説検証的に研究を進めることができるような問題、つま

り先行研究にもとづく理論が存在するような分野の問題についてまず研究をするということである。それが具体的になんであるかをここで述べるができないのは私の能力の欠如のせいである。ぜひ将来こうした研究が行われることを望みたい。それとともにもっと人的物的に恵まれた条件下で綿密な記述的な縦断的研究がなされるならば、私たちの発達についての知見は今よりはるかにすぐれたものになるであろう。

個人をその生活の中で捕らえること

さきにも述べたように私が大学で心理学を専攻することに決めたのは社会のなかで人がどのように形成されていくかということをしこしでも知りたいと思ったからであった。私の成人するまでの時期の大半が戦争の時代であったことが、私にこうしたことへの強い関心をもたせるようになったようである。ここでもあまり個人的なことに立ち入ることは控えることにするが、私のこのような願望は東京大学心理学研究室においてほとんどかなえられなかったのである。そこで行われている実験はまさに **strange adult** が **strange task** を用いて **strange room** において被験者の反応を求めるといったものであった。こうした状況から分かることは一体になのか、これで人間が分かるのか、これは私の知りたいことに答えてくれないのではないかと失望してしまったのである。心理学のことをなにも知らない若者であった私はここで心理学実験についてきちんと学ぶことをやめてしまったが、今にして思えばこれは大きな失敗であったのである。ところで私の当時感じた疑問を後に明快な形で指摘したのは **Bronfenbrenner** (1977) である。彼によれば多くの心理学実験において実験者と被験者のいる実験室という状況はまわりの世界とは全く隔絶したものとして扱われ、被験者は実験者から一方的に働きかけられ、しかもその実験者は見知らぬ人である。またたいてい実験者対被験者という二者関係が扱われしかも被験者は受身な存在とみなされている。これに対して現実の世界における人の活動は二者関係もあるが三者関係以上の場合が多く、人と人との関係は一方的なものではなく相互作用的であり、しかもそれらはある社会的コンテクストのなかで展開しているということを **Bronfenbrenner** は指摘している。彼の考え方には **Lewin** のそれが色濃く反映しており、その点でも私には共感を覚えるところが多いが、このような論文にもし私が学生のころふれることができたならその後の私の研究はもっと効率的に進んだのかもしれない。けれども幸いにして北海道大学に職を得、幼稚園の子どもに接することができ、多くのことを学ぶことができたことはすでに述べたのであるが、当時城戸先生がしばしばつぎのようなことを言っておられたことを思い出すのである。それは先生の著作(1958)のなかにも出てくるのですこしそこから引用してみよう。

「そもそも学問を理論と応用の二つの領域に分けることが問題である。教育心理学は一般心理学で研究された結果を応用して研究する学問であると考えるのは間違っていると思う」と先生は述べておられるが、当時の教育心理学や児童心理学のテキストのなかにてでくる学習や記憶などの記述は、ネズミやネコの実験の結果がそのまま人間の学習にあてはめられていたといっても過言ではないようなものであった。先生はさらにつぎのように述べておられる。

「教育の研究は教育問題を解決するための研究であって、その方法は単なる意識や行動の問題を解決するための研究とは違った操作を工夫しなければならないのである。それで教育心理学の研究は心理学的研究の方法だけを心得ていてもできないのであって、解決を必要とする教育の問題をはっきり意識していなければならないのである。心理学的研究法によって解決することができると考えられる教育の問題を設定することが先決問題である。これがはっきりしないと、

どんなに厳密な心理学的研究方法を用いても、それは教育心理学としてはピントはずれの研究になってしまう。……（中略）……心理学は教育の研究にとって重要な学問であるが、それは他の関係科学とのインテグレーションの方法において価値が認められるのである。」

これは今日の発達心理学研究に対する批判としてもそのままあてはまると私は思うのである。1964年以来私が親しくしている Kagan は、1978年に私どもの研究室を訪ねた後、日本教育心理学会総会に出席し、日本の発達研究者とも話合う機会をもったわけであるが、日本の研究者が日本に独特の問題、たとえば母と子の密着した関係、大学入試のための激しい競争などが子どもや青年の発達にどのような影響を及ぼしているかなどについてほとんど関心を払わず、アメリカの学会雑誌で取り上げられた新しいテーマをそれを日本にあてはめることの是非を全く顧慮することなくそのまま扱っていることを鋭く批判したことをよく記憶している。彼はまた私の求めに応じて書いたコメントのなかで多分に皮肉をこめて日本の研究者がすばらしい実験の技術、データ分析の技法は身につけているとも述べている（1980）。彼は学会で発表される「発達」に関する研究の数の多さに驚くとともに、恐らくそれらの中から日本について学ぶことの少ないことにながかりしたのではなかったであろうか。

ところで、さきに引用したような城戸先生の考え方に私は当時かなり影響を受けたように思われる。北大へ来てからはほとんど実験室実験をすることもなく、幼稚園の子どもや先生や母親と接したり、小学校へ出かけて観察を行ったりという毎日であった。そんな中で1956～57年には城戸先生を代表者とする「各教科教育法に関する教育心理学的研究」というテーマの総合研究の一端として「社会科教育における学業不振児の問題」に関する論文（1957, 1959）をまとめることになる。この研究の過程で農村の児童、都市の貧困層の児童についてその家庭的背景を含め教室学習場面での行動を観察する機会が多く与えられたことは、論文にはほとんど反映していないが子どもの発達をその置かれている社会的コンテクストの中で考えるということや、こうした子どもたちの能力について正当な評価を行うということがいかにむずかしいかなどについて学ぶことができたし、良い成績をとることや学習に対する動機づけがこうした子どもたちにおいては欠如していることを知ることができた。Bronfenbrenner（1979）は、親の育児様式がどのように子どもの発達とかかわるかを彼らの属している階層的背景と関連づけて検討するような実証研究の欠如を指摘しているが、子どもの発達にどのように環境が影響を及ぼすのかといった見方で行われる研究はその後あまり行われていないように思われる。

私はその後、主として母子関係と子どもの発達についての研究に今日に至るまで従事してきているが、前述したような研究を通じて得た経験、さらには1958～59年におけるタイにおける子どもの発達についての調査研究への参加、1964～65年におけるアメリカ滞在中の家庭、学校等の場における子どもの行動の観察などによっていったいわれわれはなにを問題とすべきかについて学んできたように思う。この点では城戸先生に教えられたことをある程度実行したようであるが、さてそこで問題となるのはそれではどういう方法でこうした複雑な現実生活の中で生起する事象に迫るかということであった。この点について城戸先生もはっきりとした方向を提示されてはいなかったように思うが、それは私の能力の欠如の故にそう思われるのかもしれない。先生ともうすこしこの点について討論する時間があつたならと残念に思うのである。

生態学的に妥当な条件下で子どもの発達の研究を行うことの必要性は認められても、どのように実際に進めていくかとなると困難が多い。私は最初 Lewin の弟子である Barker らの行った生態学的研究の報告書（1954）を参考にしたのである。そこで強調されていることは観察可能な行

動に関するナイーブな記述をすることと生起する行動や事象についての解釈を行いすぎないようにするというのであった。心理学の研究の方法的制約によって対象として扱うことのできる問題もまたかなり限定されているということを認識したうえで、彼らは生態学的方法を採用したのであった。いささか従来の心理学の研究の報告とは趣きを異にしている Barker らの研究は子どもの生態について生き生きと伝えてくれるところがあり、学ぶことも多かったのであるが、そこに記されていることは子どもの現実の行動の生態学的な詳細な記述にとどまっている。したがってそこから子どもの発達の過程とそのもとにあるメカニズムの解明に迫るにはなお、いくつかのステップが必要であると感じられた。Lewin がそうであるようにここでも歴史的因果の問題は扱われていないのである。

その後私が Caudill ら (1969, 1973) の育児法の日米比較研究を知り実際に1971年に Caudill と話合う機会を得るまでにはしばらくの年月を経るのであるが、この研究に対してはいろいろの批判がなされ、もはや古典的と見なされるものではあってもそれはこの分野の研究において忘れることのできる貴重な先駆的研究である。彼らは生後3～4ヵ月の日米それぞれ30名の子どもと母親を対象として1961～64年に家庭場面における長時間観察を中心とした研究を行ったのである。彼らは Caudill の長年にわたる日米両文化についての実地の体験をふまえて資料の解釈に両文化の構造的知見を用いている。今日いわゆる cross-cultural な研究は少なくないが、母子関係の分野におけるものとしてはもっともすぐれたもののひとつであることは疑いもないことであると思われる。この研究は発達の初期から子どもに文化的影響が及んでいることを具体的に示した最初のものであろう。

彼らの研究の詳細についてはここではふれないが、アメリカの母親は乳児によく話かけたりして刺激を与え、日本の母親は乳児のそばにいて抱いたりおんぶしたりすることが多く、アメリカの乳児は活発で発声が多く、日本の乳児は静かで発声が少ないなど、かなり大きな日米間の差が見いだされた。Caudill らによると、日米両国の乳児は生後3～4ヵ月においてすでにそれぞれの母親の養育法によく適応した行動をしており、また母親はそれぞれの文化の期待（自己抑制が日本で、自己主張がアメリカで求められている）に添って乳児と接しているのである。

彼らの研究に対しては観察の方法上の問題、物理的条件の日米間の相違とその心理的效果についての検討の欠如などいくつか批判されるべき点があるが、その後のこの分野の研究者が学ぶべき多くのものを含んでいる (Chen & Miyake, 1985)。とりわけ彼らが子どもたちが2歳6ヵ月・6歳の時に追跡研究を行って発達の因果の問題の解明にも迫ろうとしたことは、コーディルの急逝ということもあって十分な資料分析と解釈が行われないうで終わったとはいえ高く評価されるべきことであろう。

私自身1960年代後半から今日まで母子関係と子どもの発達を中心にいくつかのプロジェクトを進めたり、お手つだいでさせていただいてきたが、子どもをその生活の中で捕らえるということについては残念ながら不十分のままに終わっていると言わざるを得ない。もちろんその努力を怠ったわけではないが、これがなかなか容易ならざる問題であるというのがいつわらざるどころである。子どもをその生活の中において捕らえることが必要だからといってやみくもに現実の生活の場にとび込んでみても途方にくれるだけである。Caudill には豊富な体験をもとした問題意識、仮説があったので、あのようにすぐれた観察ができたのであろう。近年日本においても家庭場面でもかなり長時間にわたって母子の相互交渉を観察するという研究が増えてきている。しかしそれらにはただ労力をかけて資料を集め分析をしているという傾向が少なからず見受けられるのであ

る。家庭に行ってなにを見るのかをあらかじめ十分に検討しておかなくてはならないのであり文献にあたるというだけではだめである。それではある心理学者が言ったように「アメリカの出店」のようなことになってしまい、日本の子どもの理解にはさっぱりつながらないのである。

さて、私は日本心理学会第45回大会のシンポジウムにおいて次のようなことを提言している(1981)。

「以前私は実験的パラダイムの不毛性を感じ、日常の自由な状況においておこなわれる詳細な観察から有用な仮説が導き出されて、それによって厳密な実験研究が可能になると考えていた。しかし、これは必ずしもそう簡単なものではないようである。人間の行動の場はたとえ子どもであっても多様である。どのようなコンテキストで捕らえるかが問題である。たった一つのコンテキストで子どもの行動、母子相互作用などを捕らえることから正しい理解はえられない。またコンテキストを離れて行動の分析をすることも適当ではない。また複雑すぎる現実場面での行動を記述するよりもある程度統制された状況での観察の方がコンテキストとの関連を見つけやすい。生態観察→実験室実験よりもその逆の方がよいと考えられる」。

これは私がいくつかの研究を通じての体験にもとづいた提言なのであるが、これに対して原ひろ子が「三宅は、生態観察から得られた結果をもとに実験室実験をデザインすることは難しいというが、精緻な生態観察から実験室実験へという手順が成立する場合もありうるのではないかと思う」と論評している(1982)。原はCaudillの研究がそのよい例にならないかどうかを検討することを求めている。原は文化人類学者であり、Caudillは社会人類学者である。私の前述の発言は心理学の立場からのものであり、生態観察→実験室実験という方向に進むことはよほど特別の条件に恵まれた場合には可能であるが、多くの心理学研究者においてはそれは困難だと考えてなされたものである。もちろん日常的に社会の中に生起する事象について関心を払い、隣接諸科学の文献に目を通すことが必要ではあるが、そうしたことのうえに立って的確な問題をつかまえて実験室実験——それは予備的な実験である——を行ってみて、その結果をもって現実の場の中に入って検討をして、その後により洗練したデザインで実験を行うというのが心理学研究者が取るべき道ではないかと考えるのである。

前章ですこし紹介したように私たちの研究グループは数年前から「乳児の気質・母子相互作用と愛着形成ならびにその後の社会的情緒的発達」に関する一連の研究を日米という対照的な文化間の比較という視点から実施してきている。この研究の実施にあたっては前述したような配慮がある程度してきたつもりである。すなわち日米両文化における母子関係を中心にしたこれまでの文献の検討をし日常的場面での逸話的観察を試み、それらに基づいて米国側研究者と協議を行ってどのような統制的場面において観察が行われるべきかを決めるというような手順を踏んだのである。さらにこのようにして行われた実験的観察の結果にみられる個人間の差異ならびに文化差を検討したうえで、その生態学的妥当性をたしかめるというところまで進んでいきたいと考えている。以下ひとつのかなり問題を含んだ例を私たちの研究のなかから取り出してそこにどんな問題点があるかを具体的に述べてみたい。

私たちは日米両文化における母子関係の問題を乳児期からの母子間の情動的コミュニケーションということに焦点化して考察しようと考えたわけである。それにはいくつかの理由がある。まず、先述したCaudillらの研究の結果から米国とくらべて日本の母子が密着して長時間にわたり暮らしているということが指摘されている。これは経験的にも言えるところであり、このことが母子間の相互交渉とりわけ情動的コミュニケーションに影響を与えられられる。たとえば、

米国において母子間の距離が大であるとすると母親が子どもと身体的接触によって情動的コミュニケーションをもつことは日本よりも少ないかもしれない。また日本において母子間の距離が小さいことから、母親は子どもに対して米国ほど大げさ（私たちから見て）な表情や声の調子を用いて働きかけることが少ないとも考えられる。つぎに日本の母親は子どもの情動とりわけ怒り・悲しみ・不機嫌などネガティブな情動に対して気づかいを示すことが多いと思われる。これは子どもの気分を損わないようにすることとか、子どもを甘やかすということに現われていると考えられる（土居，1971）。子どものしつけにおいて日本の母親が子どもにあまり怒りや恐れを引きおこさないように気を配るためしばしば手ぬるくなったり首尾一貫性を欠いたりすることもこれまで指摘されていることである（Miyake, Campos, Kagan and Bradshaw, 1986）。これらの知見をもとにして私たちは母子間の情動的コミュニケーションの問題に切りこむひとつの手段として母親が子どもに禁止や指示を与えなければならないような状況においてどのような行動をとるか、子どもがすなおに従うことを強く求めるかどうか、またそこにおいてどのような情動表出が見られるか、さらには子どもの側からはどのような反応が見られるかなどを検討できるような実験パラダイムを設定したのである。私たちは子ども（23ヵ月と37ヵ月）にとって魅力のあるおもちゃを部屋の三つの隅に置き、他の一隅に母親にすわってもらい、子どもに中央の机の上にあるブロックで遊ぶ（あるいは画用紙に絵をかく）ように指示し、母親には10分間子どもがおもちゃにさわったりしないように注意してほしいと指示したのである。私たちは上述のような日米の母子関係の特徴についての知見からいくつかの仮説を立てて、目下分析を進めている。そのひとつは、日本の母親のほうが子どもがすなおに従うことを強く求めないのではないかということであり、このことと関連して日本の母親は強い調子の声や手荒な動作などで子どもに対しなのではないかとか、あまりくどくどと言語的に働きかけないのではないかというようなことが想定された。分析は日米共通のコーディングのためのカテゴリーを作成して行わなければならないのでまだそれほど進んでいないが、大まかな分析結果からみて大体上述のような母親行動の差が日米間に見られるように思われる。私たちはまた、上述の実験的観察の妥当性を検討するため質問紙を作成して母親に記入してもらったのであるが、当然のことながらこれに続くステップとしては家庭場面における観察、スーパー、デパートの玩具売場、遊園地など公共の場所における観察を実施することが考えられる。あくまでまったくの想像の域を出ないが、前述の実験場面において見られる行動は公共の場所でのそれに類似し、家庭場面における行動とは異なっているとも考えられる。かりにそのようなことが見られたとしたならば、実験室においてもたったひとつのコンテクストでなく、いくつかの性質を異にするコンテクストを設定して観察を行うという必要がでてくる。

ただ Caudill らの研究に対する批判と同じことが、家庭場面の観察には不可避免につきまとう。観察者の影響をいかにして最小限に抑えることができるかということが大きな問題である。また実験室場面での観察においても同様な問題がある。私たちがかつて別の研究（1980）で、母親と幼児の遊具を介しての相互作用を実験室で観察した際、いわゆる中層の母親が比較的リラックスして行動しているのに対し、下層の母親がなんとなく気のりのしない様子で行動し、農村の母親が緊張のせいか非常に口数が少なかったという印象をはっきりともったことを思い出す。その研究は子どもの知的発達と母親の子どもへの働きかけ方との関係を見ようとするものであったが、私たちは一定の行動カテゴリーによって母子の行動を分析してそこから上述の関係についての推論をしたのである。つまり母子がリラックスしていたかどうか、のり気だったかどうか、自分た

ちにとって大切なことをしていると思っていたかどうかなどは分析にあたってはあまり十分には考慮していない。私たちは母子のやりとりを見て大ざっぱにその全体的雰囲気などから「気楽さ」、「子どもへの関心度」、「緊張度」、「肯定的感情」、「子どもへの受容度」などいくつかの評定を実施して上述のような問題を多少とも克服しようとしたのであるが十分に成功したとはいえない。もちろんこうしたことによっていくつかの母親についての変数と子どもの変数との関係が明らかにされている。しかしここで指摘しなくてはならないのは、こうした実験場面で捕らえられた母子の姿に見られる個人差や文化差をただちに一般化してはならないということであろう。実験場面として作られた状況が現実の母子の相互作用の姿の一部分は捕らえているであろうが、それによって捕らえられていないものが相当にあることを慎重に考慮しなくてはならないであろう。

私たちが目下分析している前述の資料にもまったく同様な問題が存在する。慎重な分析検討が資料についてなされつぎに進むべき方向をすこしでも明らかにすることが必要であろう。

以上いさか冗長に私たちの研究の進め方について述べたのであるが、さきの原の指摘に対する回答として十分ではないにしても、発達研究において真に有意義な変数を扱うということが決して容易でないということを示したかったのである。発達研究者はその対象とする人びとが生活のなかでどのように他者と交渉しているかなどについてもっと眼を向けてもよいのではないであろうか。大学の心理学実験室や検査室のなかでだけ子どもや母親に接しているのではまったく不十分なばかりか、見当はずれな理解をしてしまうことにもなる。研究者が実験室で見出したことが実験室の外においても重要なことなのか、それとも些末なことなのかは、実験室の中にいるだけでは決して分からないのである。私としては当面そこから現実の場へとズームアウトしていくことが必要だと考えている。原の指摘は反対に現実の場からズームインしていくということであろう。この両方向は決して対立するものではなく、むしろいずれをとるかを問題や目的ごとに選択して、互いに補いあうということが大切であろうと思うのである。

お わ り に

本稿において私の30余年にわたる発達研究をふり振り返りながら、発達の心理学的研究がかかえている問題点のいくつかについて論じようと試みたのである。率直に申して、ここでその必要性、重要性を強調したことを私自身が自分のこれまでの研究においてほとんど解決してはいないのである。それは私の力不足によるところが大きいとは思っているではあるが、今後のこの分野における研究が発達のメカニズムの解明にむけて有効に進められるためには、個々の研究者がバラバラに仕事をやっていくということではなく、どうしてもかなり大きな共同研究体制を必要としよう。そこにおいて発達心理学研究者が力をあわせることはもちろんであるが、隣接の諸分野の研究者の援助を仰ぐこと、さらには実際に共同研究への参加を求めることが必要である。私はこれまで研究を進めてくるにあたって、小児医学・児童精神医学・文化人類学・社会学・教育学などの専門家や教師・保母・保健婦・助産婦などの実践家からいろいろの意見や助言をいただいた。また小規模ながらこれらの方々とは協力して行った研究もある。生意気なことを言うようであるが、日本の発達心理学の専門家から学んだことよりもこうした方々から学んだことのほうが多いような気がするのである。

城戸先生はよく心理学者の教育の研究にはピントはずれのものが多いと言われ、教育という事実の複雑さから考え、その研究は心理学的なものであっても、他の関係科学の方法とのインテグレーションによって進められなければならないとも言われている。これは大変にむずかしいこと

であり、わが国のみならず諸外国においても必ずしもうまく行われているとは言えないのである。この10年ほどの間に私は何回か海外の学会に参加する機会を得たが、とりわけ印象深いのはSRCDD (Society for Research in Child Development) や ICIS (International Conference on Infant Studies) の大会に発達心理学者とともに小児医学(行動小児医学という分野もある)・精神医学(児童精神医学のみならず乳児精神医学という分野もある)・保健学・栄養学・社会学などの関連諸科学の研究者、さらには保育・看護・福祉などの実践家や心理臨床の場で働く人たちが多く参加しているということであった。こうした各分野の人びとがシンポジウムなどで意見を交換しあうことができるのは、そこで扱われる問題が現実の社会で解決を迫られているようなものだからである。どうも日本の心理学者にはそういう問題を扱うことはレベルの低いことであるという偏見が強いように思われる。だから、他の分野の人とりわけ実践家を招くことはあまりないし、また招かれたとしてもたがいにあまり得るところはないと思われるのである。

くりかえしになるがこれからの研究においては、現実社会のなかでの人間観察と実践から出発するということがもっともっと重視されなければ行きづまるのではないであろうかと思うのである。

かく申す私がすぐれた実験心理学者に対したとき、いつも劣等感をいただくというのはおかしいことかもしれないが、それはやはり若い時に心理学の厳密な研究法について十分な勉強をしなかったことからくるものであろう。とぎすまされた方法をもつとともに、現実の問題に対して鋭い目を向けることが発達研究者に求められるところであろう。北海道大学教育学部付属乳幼児発達臨床センターを上述したような共同研究や実践の場にする必要があると考えるのであるが、そうすることをかつて北大幼児園を創設することを考えられた城戸先生もきっと望んでおられると思うのである。

(付記) 発達研究を進めるにあたって研究者が真剣に考慮しなくてはならないと思うことには、ここに述べたことの他にもいくつか考えられる。それらについても本稿でふれるべきであるが、いまだ十分に頭の中でまとまりができていないので、別の稿において改めて論じたいと思う。

文 献

- Ainsworth, M., Blehar, M., Waters, E., & Wall, S. (1978) *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Barker, R.G., & Wright, H.F. (1954) *Midwest and its children: The psychological ecology of an American town*. Evanston, Ill.: Row, Peterson and Company.
- Bronfenbrenner, U. (1974) Developmental research, public policy, and the ecology of childhood. *Child Development*, 45, 1-5.
- Bronfenbrenner, U. (1979) *The ecology of human development*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Caudill, W., & Weinstein, H. (1969) Maternal care and infant behavior in Japan and America. *Psychiatry*, 32, 12-43.
- Caudill, W., & Schooler, C. (1973) Child behavior and child rearing in Japan and the United States: An interim report. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 157, 323-328.
- Chen, S., & Miyake, K. (1986) Japanese studies of infant development. (In) H. Stevenson, H. Azuma & K. Hakuta (eds.), *Child development and education in Japan*. New York, N.Y.: W.H. Freeman and Company.

- 土居健郎 (1971) 「甘え」の構造。東京 弘文堂
- 藤永保編 (1973) 児童心理学。東京 有斐閣
- 原ひろ子 (1982) 育児・教育文化と人間形成, 講座 現代の心理学 8 文化と人間。東京 小学館
- Kagan, J., & Moss, H.A. (1962) *Birth to maturity: A study in psychological development*. New York, N.Y. : Wiley.
- Kagan, J. (1964) American longitudinal research in child development. *Child Development*, 35, 1-32.
- Kagan, J., Kearsley, R.B., & Zelazo, P.R. (1978) *Infancy: Its place in human development*. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
- Kagan, J. (1980) A note on developmental psychology in Japan and the United States. *Annual Report 1978-1979*, Research and Clinical Center for Child Development, Faculty of Education, Hokkaido University, 2, 1-3.
- Kagan, J. (1984) *The nature of the child*. New York, N.Y. : Basic Books Publishers.
- 城戸幡太郎 (1958) 心理学と教育。東京 国土社
- Lewin, K. (1935) *A dynamic theory of personality: Selected papers*, New York, N.Y. : MacGraw Hill. (訳書 : 相良守次・小川隆訳, パーソナリティの力学説。岩波書店, 1955)
- 三宅和夫 (1955) 児童小集団の構造の変容について 教育学研究 21,
- 三宅和夫 (1957) 学級における児童の地位と学習場面での反応について 教育社会学研究 11, 15-27.
- 三宅和夫・城戸幡太郎 (1959) 社会教育における学業不振児の問題-教科教育法在教育心理学的研究 教育心理学研究 6, 40-45.
- 三宅和夫 (1968) 知能指数の変動と行動特性との関係 北海道大学教育学部紀要 15, 29-38.
- 三宅和夫・田島信元・臼井博 (1980) 自由遊び場面における母子相互交渉と幼児の知的発達-日米比較研究 北海道大学教育学部紀要 37, 1-76.
- 三宅和夫 (1981) 乳幼児発達研究の立場から, シンポジウム「発達心理学とエソロジー」 日本心理学会45回大会論文集, S 71.
- 三宅和夫 (1983) 初期の行動発達と気質-母子関係とのかかわり サイコロジー 4, 26-33.
- Miyake, K., Chen, S., Ujue, T., Tajima, N., Satoh, K., & Takahashi, K. (1983) Infant's temperamental disposition, mother's mode of interaction, quality of attachment and infant's receptivity to socialization. *Annual Report 1981-1982*, RCCCD, Faculty of Education, Hokkaido University, 5, 25-50.
- Miyake, K., & Chen, S. (1982) Relation of temperamental disposition to classification of attachment: A progress report. *Annual Report 1983-1984*, RCCCD, Faculty of Education, Hokkaido University, 7, 17-26.
- Miyake, K., Chen, S., & Campos, J.J. (1985) Infant temperament, mother's mode of interaction, and attachment in Japan: An interim report. (In) I. Bretherton & E. Waters (eds.), Growing points of attachment theory and research. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 276-297.
- Miyake, K. (1986) Relation of temperamental disposition to classification of attachment: Comparisons of the results obtained in two independent samples. *Annual Report 1984-1985*, RCCCD, Faculty of Education, Hokkaido University, 8, 9-15.
- Miyake, K., Campos, J.J., Kagan, J. & Bradshaw, D.L. (1986) Issues in socio-emotional development in infancy. (In) H. Stevenson, H. Azuma, & K. Hakuta (eds.), *Child development and education in Japan*. New York, N.Y. : W.H. Freeman and Company.
- Thomas, A., Birch, H.G., Chess, S., Hertzog, M.E., & Korn, S. (1963) *Behavioral individuality in early childhood*. New York, N.Y. : New York University Press.